
【P4A】鳴 + 花・12話ネタ

リン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

【P4A】鳴+花・12話ネタ

【Nコード】

N9353Z

【作者名】

リン

【あらすじ】

自サイトに掲載している小ネタです。

ネタバレにご注意ください。

12話の番長と花村くんの仲良しぶりがつボだったのでつい書いてしまいましたw が、かぼーにはなってない……と思います

鳴上がヤツの精神攻撃を受けた時、ありえないものを見たと思った。

だって、アイツはいつでも頼りになつて、本当にリーダーに相応しいヤツだから。ペルソナを何体も使えるのも鳴上だけ。だから俺達も……いや、俺も無意識に頼りきっていたのかも知れない。

「くそつ、鳴上！ おい、鳴上返事しろ！」

「鳴上くんにもしかして私達の声届いてない！？ そんな、どうしよう〜！」

「千枝、落ち着いて。花村くん、私達でシャドウの攻撃を防ぐわ。だからその間に鳴上くんをお願い！」

「先輩頼みましたよ、つと！」

「クマも頑張るクマ！」

里中達が必死に応戦する中で、俺は必死に鳴上に呼びかける。でも虚しく空回りするだけで、届かない。

今鳴上はどんな状況にいるのか全然わからない。ただ今にも泣きそうな顔をして、虚空を見つめている。そんな表情、今まで一度も見たことない。

どうしてそんな顔すんだよ。何か大切なもんでも失くしちゃったのか？ バカかよ、それは全部まやかしだつてのによ！

「おい！ 鳴上つ、帰ってこい！ しっかりしろよ！」

くそつ、どうして俺の声が届かないんだ！ シャドウの精神攻撃が相当強力だつてことかよ！？

もう少し距離を詰めないとダメかも知れない。そう思った矢先だった。

「やめる……ちがう……！」

鳴上が悲鳴を上げて、後ずさった。そのまま首元を押さえて苦しそうな顔になる。

何だよ、何が起きてるんだよ!?

とにかくこのままじゃ鳴上が危ない。本当に……本当に。

自分の考えに、ぞっとした。

鳴上が、いなくなる。

考えたこともなかった。いつも自然に隣にいて、俺の話に笑ったり、時々ズレた突っ込みしてくれたり……それで、真剣に話を聞いてくれたり。それが当たり前になってた。

俺の親父ジュネスの店長だから、ずっとどこか居心地悪くて……でも余計な気遣いとかされたくなくて、いつも無駄に明るく振舞ってた。「ホントお前はアホだよな」って言われるようなキャラを敢えて演じてたと思う。

でも鳴上は、そんな俺の姿を見破っちまった。けど不思議と不快感はなかった。それどころか居心地がいいというか……何でも話せるようになった。つい弱音を吐いちまえるほどに、だぜ？ 今まで俺、一度だってそんなことできなかったのにさ。

いつの間にか鳴上は、俺にとってかけがえのない奴になってたんだ。

だから、こんなところで失いたくなんかない。絶対助けてやる。

今度は俺の番だ！

「大丈夫か？」

「ああ。……ありがとう、陽介」

必死に名前を呼んで。

必死に伸ばした手を、掴んでくれて。

鳴上 悠は、そうして俺に笑いかけてくれた。

お前も俺と同じ気持ちでいてくれた。そう、確信できたんだ。

「ここから下はちょいとしたおまけですw」

「また集まれる……そう約束できて、本当よかった」

菜々子とクマがランプで遊んでいる様子を微笑ましい思いで見つめていると、鳴上がしみじみとそんなことを呟いた。しかも緩い笑みつきだ。

おそらく独り言のつもりだったのだろうが、何と珍しい光景だろう。ついからかってやりたい気持ちが充満し、肘で脇腹をつつきまくる。

「あん？ なんだよ、そんなに寂しかったのか？ 可愛いヤツよのう」

「！ 陽介、聞いてたのか？」

「聞いてたつつか、聞こえたんだよ。全くお前つてば結構さびしんぼだったんだなあ」

「花村、いい加減気持ち悪い」

半目の里中に一刀両断されてしまった。天城達にも呆れた顔をされていたので大人しく引き下がる。

「だって悠がまた集まる約束できてよかったってしみじみ言ってたからさ。ついつい」

「鳴上くんが？ そりゃ珍しい。なんかあったの？」

「……もしかして、シャドウの精神攻撃が関係してるとかツスカ？ その言葉に鳴上の目が見開かれた。どうやら当たりらしい。

「……今みたいに、事件が解決して。みんなで会うことが、なくなっただけだ」

それから少し辛そうに、話を続けた。

里中と天城は他の男子との仲を深めていくにつれて、集まる回数が減っていったこと。

巽は小西尚紀に、半ば無理矢理皆で集まっているために疲れを感

じると愚痴っていたこと。

クマは元いた世界に戻っていったこと。

久慈川はみんなに何の説明もないまま、店を畳んでどこかへ引越していったこと。

そして自分だけは最後まで一緒にいたけれど、今のような空気感
はほとんどなくなっていたこと。

嫌でも重い空気が垂れ込める。いつの間にかクマも黙って話に耳
を傾け、菜々子は心配そうに鳴上を見つめている。

「なんつーか、陰湿ツスねー……」

「ほんつと。大体私が悠先輩達の前から黙って離れるなんてことす
るわけないのに！ あったまきちゃう」

「クマもさつき菜々子ちゃんと遊ぶ約束したクマ。だから帰らない
クマ！ ずつというクマよ！」

「お前は俺んちに居候してんだからちよつとは遠慮しろつつの！」
思わず突っ込むと、小さな笑いが起きる。少し空気が柔らかくな
ったようでよかったか。

「あたしだって信じらんないよ。だって彼氏疑惑っぽいじゃん？
そんな風に思ってる男子なんか誰もいないってのにさ」

「私もだよ。なんか複雑……」

「俺にもせつかくだから彼女疑惑欲しかったなー。なーんて」
「残念だったな、陽介」

笑顔なのはわざとなのか、無意識なのか。どっちにしる……

「笑いながら言うなんて、ひどい。ひどいわ相棒」

みんなにも笑われてしまった。狙っても狙わなくてもこんな役回
りばかりでちよつとへこみそうになる。

……でも。

「おにいちゃん楽しそう。菜々子も楽しいよ、おんなじだね！」
「……ああ。同じだ」

相棒の、心から嬉しそうな笑顔に満足したからよしとしよう。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9353z/>

【P4A】鳴 + 花・12話ネタ

2011年12月29日09時51分発行